

主 論 文 要 旨

2011年3月29日

古道・旧河道の歴史的変遷 およびその活用に関する研究

なかねようじ
中根洋治

主論文要旨

本論文では、筆者が約40年前から愛知県とその近傍の土木史に関する踏査を行ってきた実績を背景に、「古道・旧河道の歴史的変遷およびその活用に関する研究」と題して、古代からの道と旧河道の実態を調査するとともにその活用方法を研究し考察する。

古代からの道は人類発生の石器時代からあったと思われる。旧河道は約10万年前のものまでほぼ確認できるところがある。その確認方法は、地質や文献・現地調査などの結果による。また本論文では古代まで遡る事柄を含むので、筆者独自の古代巨石信仰や地名調査などの人文科学的な事柄も交えて総合的に考察する。

古道について、山間部や丘陵部の街道は、時代と共にどのような変遷してきたかを明らかにする。その結果、古道は古いほど高い尾根のルートを通っているケースが多いことが分かった。江戸時代になって戦いが無くなると山腹が利用されるようになり、明治時代に車輛が現れると勾配の緩い川沿いの道が利用されるようになった。

また尾根の古道には、山と山の間で凹んだ所に盛土した場所がある。この盛土構造が現代の土工基準より急な法面を有しており、これについても考察する。

旧河道について、沖積低地の旧河道や後背湿地には砂層や軟弱層が堆積していることが多いので、浸水しやすく、震災を受けやすい。近年、山間部の人口は減り、平地部へ進出する傾向にある。平地部の良好な宅地には既存宅地があり、後からの宅地は沖積低地の旧河道・後背湿地などの災害時の危険箇所へ開発が及びつつある。

本論文の研究結果から、尾根を多用する古道の調査結果により、現代の道路や鉄道が水害や震災により通行止めになった場合、避難・連絡・救助・復旧などのために使われることがあること。また、人々の森林浴と自然に親しみながらの健康維持のための散策に利用できること。旧河道の調査結果からは、ハザードマップと共に、浸水や震災の危険区域が予想出来、災害防止に役立てることが出来ることなどが理解される。